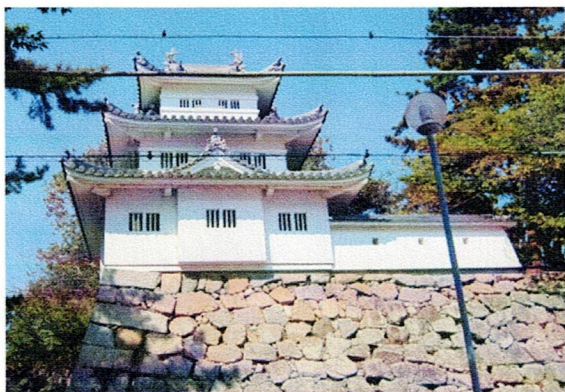


令和6年度 第2回バス研修会 津城跡 石垣めぐり

1 三重県津城跡見学 <写真は模擬三重隅櫓>



津城は、当初織田信長の弟・織田信包が、伊勢上野城主であったとき、安濃津の地に元亀2年(1571)から、安濃津城として築城を開始し、天正8年(1580)に、五層の天守を建てて完成しました。その間には、伊勢上野城で信包の世話になっていた信長の妹・お市の方とその娘・茶々・初・江の三人姉妹も、信包とともに安濃津城に移り、本能寺の変が起こった天正10年まで、安濃津城で暮らしていたという説もあるほか、信包の生母・土田御前が、信包に引き取られて

天正18年(1590)から病没する文禄3年(1594)まで、安濃津城で暮らしていたとも伝えられています。

その後、信包は近江国へ転封させられ、代わって文禄4年に富田父子が安濃津城へ入城し、のちの富田信高が城主となりました。富田氏は秀吉に仕えていますでしたが、関ヶ原の戦いの前に徳川方に就いたため、津城は、関ヶ原の戦いの直前、毛利秀元を総大将とする約3万人の西軍勢に攻められました。それに対して城に立て籠もって、津の住民も多数参加する籠城戦を行いましたが、信高は城を明け渡して、剃髪して専修寺に籠り合戦を終えました。その後、関ヶ原戦で東軍が勝利すると、信高は再び安濃津城主に返り咲きましたが、慶長13年(1608)に家康の命で、城主が藤堂高虎に代わりました。



写真は織田信包創建の大天守台を藤堂高虎が改修したものです。入口の切り裂きの奥には大天守の穴蔵があります。手前右側の石垣の崩れは、大天守台取付多聞櫓台を取り払った跡です。



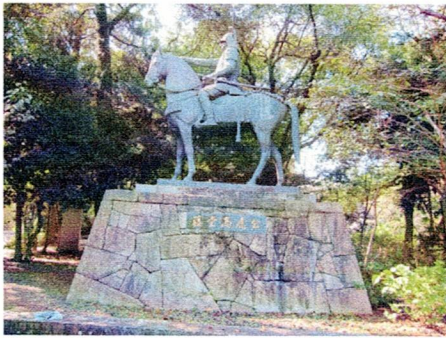
写真は石垣が一番きれいに見える場所です。すべて打込みはぎの積み方です。戌亥櫓は高虎考案の層塔型三重櫓です。北内堀からの石垣上までは約10mの高さがありました。

現在の津城跡は、信包が築城した城郭を高虎が慶長16年に大改修したもので、明治維新後、城郭も外堀のすべてと内堀の大半が埋め立てられ、本丸と西の丸の石垣と郭が残り、内堀は北と西に当時の半分ほどの幅に狭められて残っています。

<以上パンフレットから>

2 藤堂高虎の生涯

藤堂高虎は、近江国藤堂村（現在の滋賀県犬上郡甲良町在士）で生まれました。藤堂家は貧しい暮らしをしていたのですが、藤堂高虎は大きく育ち、一説によると身長6尺2寸（約190cm）の大男だったと言われています。藤堂高虎が戦国大名「浅井長政」の家臣として仕え、初陣を果たしたのは1570年（元亀元年）の織田・徳川連合軍と対峙した「姉川の戦い」です。足軽としての参戦でしたが見事に武功を上げます。



さらに、1576年（天正4年）には「羽柴秀長」の家臣となり、その後も中国攻めや「賤ヶ岳の戦い」、四国攻めや紀州征伐と言った、豊臣秀吉のかかわった、いくつもの合戦に出陣。数々の功績を残し、1万石の大名となりました。その後、藤堂高虎は粉河（こかわ）2万石の大名となるも、主家断絶で豊臣秀吉の家臣になります。そして、豊臣秀吉に仕える一方で、藤堂高虎は徳川家康との親交を深めていきました。1599年（慶長4年）、徳川家康が藤堂高虎邸に宿泊した日に「石田三成」の急襲を受けるという目に遭いますが、これを藤堂高虎は阻止したのです。

そして、1600年（慶長5年）9月に始まった「関ヶ原の戦い」では東軍として出陣。ここでの功績が認められたことにより伊予（現在の愛媛県）20万石を与えられ、今治に城を築きます。その後、1608年（慶長13年）には「徳川秀忠」から伊賀、伊勢に加増移封（いほう：国替えのこと）され、22万石の津藩主となりました。さらに、「大坂夏の陣」では多くの兵を失いますが、徳川方の勝利へ寄与した軍功が認められ、1617年（元和3年）には32万3千石となります。32万石あまりの石高は、藤堂高虎亡きあとも引き継がれ、幕末まで変わることはありませんでした。

しかし、そこまで武功を上げた藤堂高虎も晩年には失明し、1630年（寛永7年）10月5日に柳原にある江戸藩邸内で死去したのです。

3 藤堂高虎に関連する城・城郭

築城名人としても知られる藤堂高虎は、多くの城を築城・修築しています。生涯で築城に携わった数は20を超えとも言われ、藤堂高虎の建築の腕は城だけに限らず、日光東照宮の大造替えにも活かされました。

なぜ、藤堂高虎がこれほど多くの築城や建築を任されることになったのでしょうか。それは、藤堂高虎が築城を「戦の要」ととらえ、実戦に強いだけでなく、新しい構造を生み出すことで早く城が完成するようにしたためです。実際に、藤堂高虎はどのような築城をしていたのか、藤堂高虎が築城した代表的な城とその特徴を見ていきます。なお、以下の7つの城は藤堂高虎とかかわった年代が古い順に並べました。

（1）赤木城：三重県熊野市

赤木川の北岸にある標高約230mの丘陵に築かれた、藤堂高虎が30代の頃に築いた城です。尾根を利用した中世山城の形式を引き継ぎながら、複雑な虎口（城の出入り口）の形態、石垣の多用など、近世城郭の手法が採用されているため、中世から近世への移行段階の城と位置付けられています。当時の熊野北山は、豊臣秀吉による検地への反発から大規模な一揆が頻発していました。豊臣秀吉から紀州を任された羽柴秀長配下の藤堂高虎は、1589年（天正17年）頃に、一揆鎮圧の拠点として、この「赤木城」を築いたのです。一揆を鎮めるためとはいえ、交通の要所でもない山深い里に不釣り合いな立派な城を築いたのは、豊臣秀吉が熊野の豊富な森林資源に目を付けており、支配した領地を統治し、豊臣家の威光を示すためだったとも言われています。

1992年（平成4年）からは、13年かけて石垣の積み直しや遊歩道の設置など、復元整備を実施。修復された赤木城跡の主郭からは、美しい棚田や赤木の町が一望できます。

(2) 大洲城：愛媛県大洲市

伊予国守護のために、1331年（元弘元年）、鎌倉時代の終わりに創建されました。200年以上宇都宮氏が居城していましたが、戦国時代末期に「大野直昌」（なおしげ）へ、さらに豊臣秀吉の四国平定によって「小早川隆景」へと城主が変わっていきます。

藤堂高虎が「大洲城」の城主となったのは、1595年（文禄4年）のこと。小早川隆景が九州に封ぜられたのちに城主となっていた「戸田勝隆」の朝鮮出兵中の病死がきっかけでした。藤堂高虎は大洲城を得ると、改修を行ない自身の居城とします。

大洲城周辺には川があったことから、藤堂高虎は天然の堀にして、地形をうまく使った大改修を実施するなど、中世からの城郭を近世城郭へと生まれ変わらせました。

その後藤堂高虎は、関ヶ原の戦いで新たに得た恩賞により、改修した大洲城を養子の「藤堂高吉」へ譲ります。のちに、城主は藤堂家から脇坂安治へ引継ぐことになりました。

現代に入り幾度もの復元工事などを経て、江戸時代の姿を忠実に再現した天守が復元。解体されていない台所櫓、高欄櫓、苧綿櫓、三の丸南隅櫓は、国の重要文化財に指定されています。

(3) 宇和島城：愛媛県宇和島市

もとは鎌倉時代に造られた板島丸串城という城で、1596年（慶長元年）に藤堂高虎の手によって改築が始まりました。この城の大きな特徴が、不均等の5角形をした外郭です。

特徴的な外郭は上から見れば5角あることが分かりますが、地上から見ると四角形のように見えます。隠密が城の形を見破れないという逸話が残るほど、実に巧妙に作られた城でした。

このように一見すると四角形に見える外郭を藤堂高虎が作ったのは、有事の際に血路を開くためだったと言います。他にも海に面した地形を活かすなど藤堂高虎の築城の手腕が発揮され、そのあとも引き継がれていきました。

しかし、宇和島城築城もつかの間、藤堂高虎はすぐに今治城築城のために去ってしまいます。のちに宇和島城は、仙台伊達家の分家が代々住む城となりました。

(4) 今治城：愛媛県今治市

1602年（慶長7年）に築城。関ヶ原の戦いの戦功により、伊予半国20万石を拝領した藤堂高虎が、瀬戸内海に面した海岸に築いた平城で、豊臣家を慕う西国大名を監視する役割を担っていました。広大な水堀と反りのない直線的な石垣、脆弱な地盤を安定させるための幅広い犬走り（石垣の下の方）、侵入者の方向感覚を失わせ、能率的な都市経営を目指した升目状の城下町設計など、最新の技術とアイデアを盛り込んで築かれており、藤堂高虎の代表作とも評されています。

築城当時は、海水を引き入れた三重の堀に囲まれ、海から堀へ直接船で出入りできるなど、海上交通の要所であることの利を最大限に活かした構造になっていました。

さらに本丸には、五重塔に似た構造の、日本初とも言われる「層塔型」の五重天守が築かれます。これまでは、「安土城」の天守に代表されるような「望楼型」の天守が主流でしたが、藤堂高虎が層塔型を創始。それ以降、規格を統一することで工期を短縮できるという利点があることから、一気に層塔型の五重天守が主流になっていきました。明治時代に建物のほとんどが取り壊され、内堀と主郭部の石垣を残すのみとなってしまった今治城ですが、主郭は城跡として整備されています。

(5) 江戸城：東京都千代田区

室町時代「太田道灌」によって築かれ、1590年（天正18年）年に徳川家康が入府し、居城としました。徳川家康が天下平定をしたのち、時の権力者にふさわしい城に改修するため、天下普請（江戸幕府が全国の大名に命じた公共工事）が繰り返されますが、本格的な工事が開始されたのは、徳川家康が将軍職を息子の徳川秀忠に譲った1604年（慶長9年）頃と言われています。新しい「江戸城」の縄張りや、築城の名人である藤堂高虎に任されました。

徳川家康は、江戸城を公的には儀式の場、私的には居住空間にして、本丸を広くしようと考えましたが、藤堂高虎は、まだ実戦にも対応できる城にしておくべきであると進言。計画通りに改修したとされています。徳川家康が天下を取り、征夷大將軍となるも、西には豊臣秀吉亡きあとの豊臣方が控えていたためです。

武家諸法度により江戸城以外の城は増改築や新築が叶わなくなったため、江戸時代以降幾度も増改築された唯一の日本の城となりました。三代将軍「徳川家光」の時代まで、大規模な増改築があったと言います。工事期間は、30 年余りでした。

その後、昭和 43 年には、東御苑として、本丸、二の丸、三の丸の一部が一般公開されています。

(6) 伊賀上野城：三重県伊賀市

1585 年（天正 13 年）に、近代郭城として「筒井定次」の手によって築城されました。それから時が過ぎ、1608 年（慶長 13 年）に、藤堂高虎に徳川家康から伊賀 10 万石を含む 22 万石の恩賞が与えられ、さらに国替えが行なわれます。

そして、藤堂高虎は豊臣氏との戦に備えるために「伊賀上野城」の改修に取り掛かることになりました。これにより、およそ 3 倍もの面積に拡大。本丸も拡張され、10 の櫓を建設、石垣は 30m と高く積み上げられました。こうした藤堂高虎の大改修によって、伊賀上野城は守りの固い屈強な城へと大変身を遂げます。

しかし、伊賀上野城は未完成のまま築城は中断してしまいました。これは、本来の目的であった豊臣氏が滅んだためです。築城途中で暴風雨によって壊れてしまった 5 重の天守も、昭和に入って三重の天守として復元されるまで、建設が再開されることはありませんでした。

(7) 津城：三重県津市

織田信長の弟である「織田信包」が 1580 年（天正 8 年）に築城した城です。当時、城下町として栄え、低湿地に建てられた小規模な平城でありながらも、川の流れを外堀に入れるなどして、防御の堅い城でした。

1611 年（慶長 16 年）、そんな「津城」へ国替えでやってきたのが藤堂高虎です。やってくるなり、藤堂高虎は石塁をより高くする、三重の櫓を作るなど、大規模な改修を始めました。さらに、藤堂高虎は築城だけにとどまらず、町人のための伊予町の整備、武家屋敷の整備も進めていきます。津城はまさに、藤堂高虎の築城技術が城だけでなく、町づくりにまで及んだ場所と言えるでしょう。藤堂高虎のあとは、子の「藤堂高次」が津城を継ぎ、さらに城下を発展させ、明治時代に入るまで城下町としての機能を果たしました。

(8) 藤堂高虎がかかわったその他の城

他にも、藤堂高虎の城づくりの真髓がよく分かるのが、「篠山城」です。篠山城は、関ヶ原の戦いのあとに、徳川氏が豊臣氏包囲の目的で藤堂高虎に築かせた水の上の城。豊臣氏のいる大阪に近く攻められる可能性もあったことから、石垣を高くするだけでなく、幾重もの門を築き、敵が侵入しにくいようにしました。なかなか侵入できないとなれば、敵兵は遠距離に対応した武器で攻略していくしかありませんが、藤堂高虎はこうした外からの攻撃にも耐えられるよう堀を長くした城も築いています。当時は遠距離といえば弓の時代。弓の飛距離をも超える堀を作ることで、どうやっても攻めにくい城にしたのです。

他にも藤堂高虎は、「膳所城」や「甘崎城」（愛媛県今治市）の築城、「伏見城」、「丹波亀山城」の改修に携わるなど、城づくりにおいて多大な信頼を得ていました。

<以上 刀剣ワールド 城日本の城と戦国武将藤堂高虎（藤堂高虎と城一覧）から引用>

4 高山神社（津城跡の近くにあり藤堂高虎を祀ってある神社）

御祭神

藤堂高虎公像（四天王寺蔵）



御祭神について

御祭神の藤堂高虎公は、弘治二年（一五五六年）滋賀県の藤堂村（現、甲良町）お生まれになりました。

青年時代は、浅井長政、秀長（秀吉の弟）に仕え、出世の糸口をつかむことが出来ました。秀長の死後は秀吉の直臣として、宇和島（四国）の城主となりました。秀吉の死後は家康に起用され、関が原合戦、大阪冬・夏の陣に数々の武功をたて、戦国武将として、不動の地位を確立しました。また一方では築城の名手としても名高く、宇和島、今治をはじめ膳所、丹波、亀山、篠山、伏見、大阪、江戸等多くの城の設計を手がけました。

そして家康側近としては、外様大名であり乍ら、譜代大名たちのなし得なかった、多くの重要な問題や困難な事業等をすべてなしとげるなど、比類なき、敏腕をふるい、のちには伊賀を合わせると三三万三〇〇〇石の領主となり、津市発展の礎をききました。寛永七年（一六三〇年）江戸藩邸に於いて七五才の輝かしい生涯を閉じられました。

安濃津と藤堂高虎公

織田信長の弟、信包ノブカネが藩主の頃の安濃津まちは僅か五万石の小さな城下まちでした。

慶長十三年（一六〇八年）藤堂高虎公が伊予（四国）の今治から津に移封、藩主となりました。高虎公は自ら先頭にたって、「城」を中心としたまちづくりに努めました。

武家屋敷は城の北、西、南側とし、東には町屋を配置しました。そして、まちはづれを通っております伊勢街道を城下へ近づける一方、岩田川の水を堀川により、城下へ引き入れ、水、陸による交通の便をはかり、人の交流、物資の運搬を盛んにし、津のまち発展の基盤を整備しました。のち津藩は一躍三三万（津・伊賀を合わせ）の大城下町となりました。

安濃津の開祖、藤堂高虎公のおくり名が「高山居士」でありますので、同公をお祀りするお宮さんの社号を高山神社と申し上げ、津の氏神さまとして市民の方々から広く篤い信仰をいただいております。

<神社から頂いたパンフレットから>



続日本 100 名城

津城跡 石垣めぐりマップ



12

津城大天守台の算木積み ☐

確かめたらチェック ☒

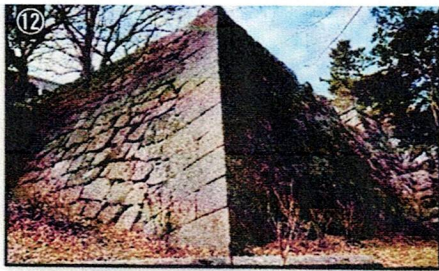
津城は、「築城の名手藤堂高虎」が築城の粋を集めて築いた城。
あなたも石垣づくりの名人といわれた高虎の「高虎流石垣」を
その目で確かめてみませんか。

津城では藤堂高虎が石垣づくりに多用した「算木積み」や「犬走り」、「矢穴」「刻印」などを見ることができます。石は主に津市周辺より採掘され、石材は花崗岩などが使用されています。津城に現存する石垣は、一部に織田信包や富田信高の時代に築かれたと思われる部分（野面積み）を残すものの、ほとんどは慶長期の石垣を中心としており、その多くが高虎改修時のもの（打込みはぎ・切込みはぎ）です。また、江戸時代より近代にかけて数度の修復を受けた形跡が確認できます。明治以降に改修されたり取り払われた部分はあるものの、本丸と西の丸の石垣はほぼ往時のまま残っています。

石垣づくりの名人ともいわれた高虎は、石垣の隅部に「算木積み」を多用しました。算木積みは石垣積みの要である隅部を補強し、崩れにくくする工法です。算木積みの強さは、平成 28 年（2016）の熊本地震で崩れなかった熊本城飯田丸五階櫓の算木積みでも証明されています。高虎は算木積み改良を重ね、直線的にまっすぐに高く積む技術を生み出しました。津城本丸の石垣は、内堀より約 10m の直線的な算木積みを採用しています。また、同時期に高虎により改修された伊賀上野城本丸西部の高石垣は、約 30m の高さを誇ります。

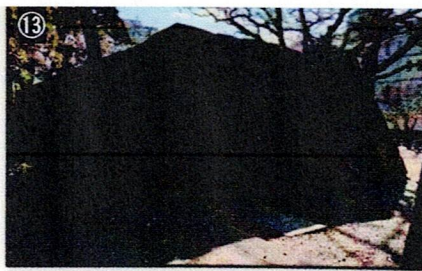
また「犬走り」は、高虎の前任地である今治城（愛媛県）において、海城の欠点である軟弱な地盤を補強するために考案されたものです。津城本丸を囲む広大な内堀（最大幅約 100m）は沼地となっており、津城の犬走りも同じく軟弱な地盤を補強するために設けられました。しかし戦後の内堀埋め立てによって現存していません。

石垣の積み方も慶長期には飛躍的な発展を遂げました。津城では、野面積みから打込みはぎ・切込みはぎと進化する過程で、石垣を加工した痕である「矢穴」も散見することができます。また、石垣に彫られた様々な模様の「刻印」も豊富に見ることができます。



⑫ 大天守台の算木積み □

隅部をまっすぐに積むきれいな算木積みが見られます。寛文期改修時のものです。大天守台の大きさは、南北 16m 東西 14m あります。



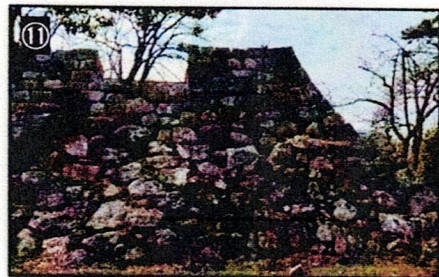
⑬ 埋門 □

寛永16年(1639)に本丸よりの脱出口として造られました。きれいな算木積みと切込みはぎを見ることができます。石垣表面には「のみ」により「すだれ仕上げ」がしてあります。



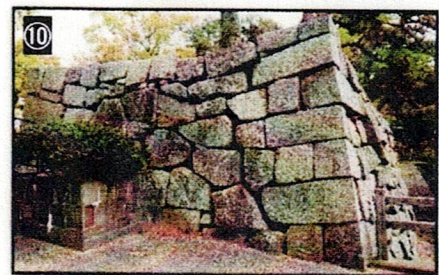
⑭ 西多門櫓台 □

西鉄門が接続され「桁形」を形成していました。全ての面にたくさんの「刻印」を見ることができます。



⑪ 大天守台 □

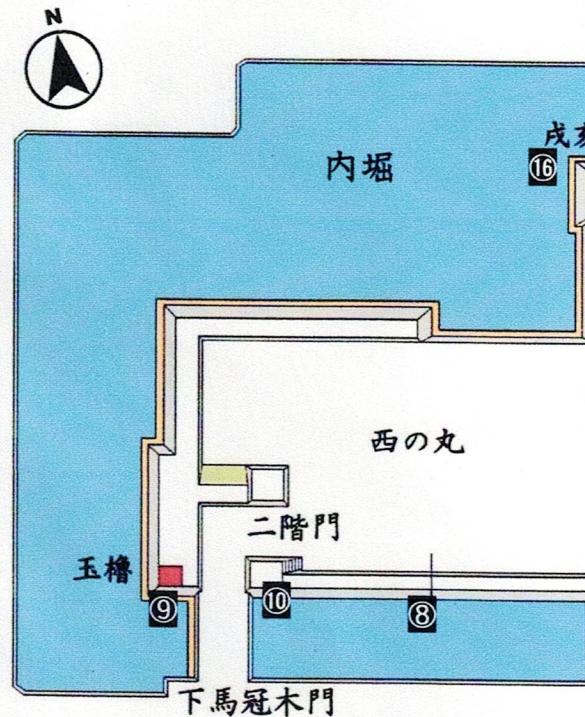
織田信包創建の大天守台を藤堂高虎が改修したものです。入口の切り裂きの奥には大天守の穴蔵があります。手前右側の石垣の崩れは、天守台取付多門櫓台を取り払った跡です。



⑩ 西の丸二階門〔櫓門〕台 □

本丸に入るために西の丸に設けられた内郭大手門がありました。大手桁形を形成していました。隅部にはきれいな算木積みが見られます。

津城跡 本丸・西の丸 石垣めぐりマップ



初代津藩主・藤堂高虎公を祀る神社です。高虎公のおくり名が「高山大僧都」であることから社号が「高山神社」とされ、津の人々から篤い信仰を集めています。続日本 100 名城のスタンプがあります。



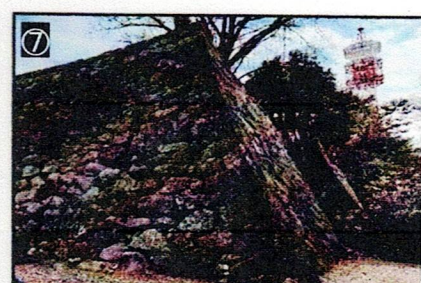
⑨ 西の丸玉櫓〔西の丸角櫓〕台 □

西の丸には武器庫がありました。手前の木橋西側石垣上には玉櫓と呼ばれる鉄砲の弾丸を収める櫓が建っていました。石垣下の犬走りは石垣修理と石垣崩壊防止のために明治以降に造られました。



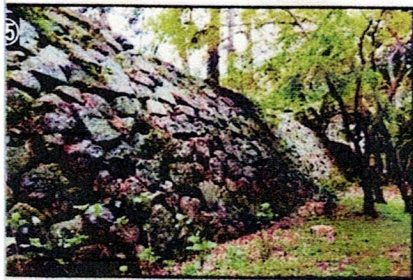
⑧ 本丸と西の丸の接続部 □

石垣の積み方がはっきりと分かる場所です。左側が打込みはぎの布積み、右側が明治以降に積まれた谷積み(落とし積み)です。右側の部分には本丸と西の丸を結ぶ土橋となっていました。



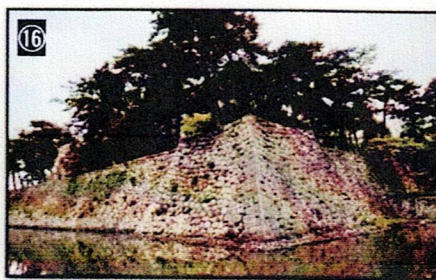
⑦ 大天守台と小天守台〔奥〕 □

往時は織田信包創建の望楼型五重天守が建っていました。野面積みに近い打込みはぎで積んであり、隅部は算木積みに近い積み方です。南面に火災によると思われる黒い焼痕を見ることができます。大天守台前の犬走りは約 8m ありました。



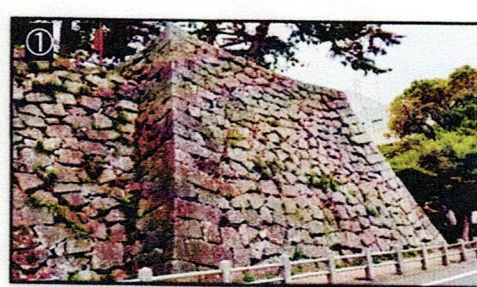
北多門櫓台 □

面積に近い打込みはぎの石垣です。「転用石」
見ることができます。石垣の上には幅約6m長さ
95mの長大な多門櫓が建っていました。



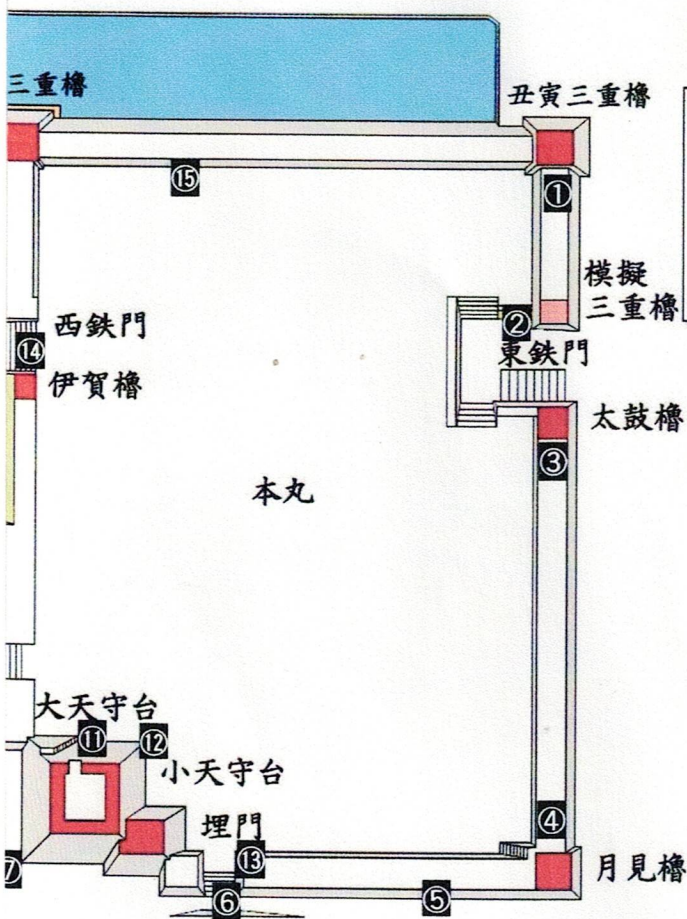
北多門櫓台と戌亥櫓台 □

北内堀と石垣が一番きれに見える場所です。全
てが打込みはぎの積み方です。戌亥櫓は高虎考案
の層塔型三重櫓です。北内堀から石垣上までは
約10mの高さがありました。



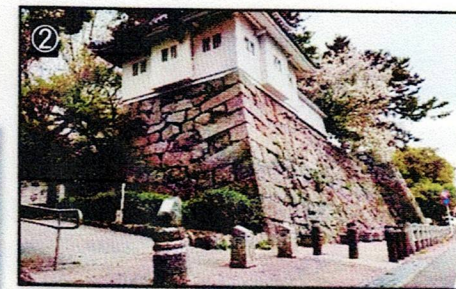
丑寅櫓台 □

隅部には石垣が最も崩れにくいとされる縦横比2.5:1
の直線的な算木積み石垣を見ることができます。丑寅
櫓は津城の鬼門（北東）を守る高虎考案の層塔型
三重櫓でした。



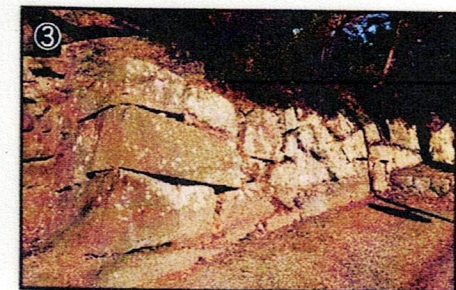
津まんなか
ガイド 詰所

「安濃津ガイド会」が
在駐して周辺のガイド
を行っています。
開所は土日祝日の
9:30~16:00です。
続日本100名城のスタ
ンプがあります。



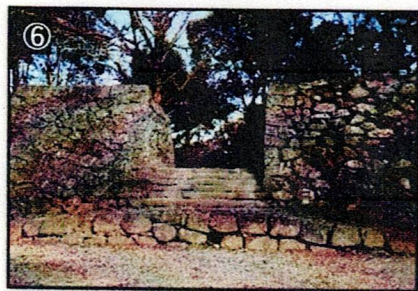
東鉄門跡 □

この場所には東鉄門を取り巻く拵形が形成されてい
ました。南東部石垣上に昭和33年(1958)に三重
模擬櫓が創建されました。きれいな算木積みや矢穴
を見ることができます。



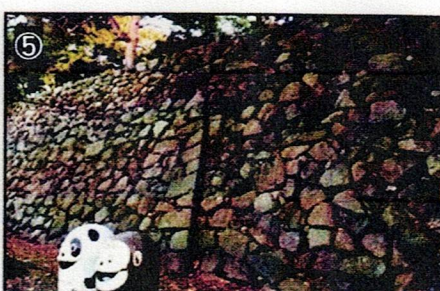
太鼓櫓台 □

時刻や登城を知らせたりする太鼓が置いてあった二
重太鼓櫓台です。高さは6mほどありましたが、現
在は下の部分が残っています。隅部に算木積みが見
られます。太鼓櫓台下には、犬走りから土橋へ渡る
「犬走り板橋」がかけられていました。



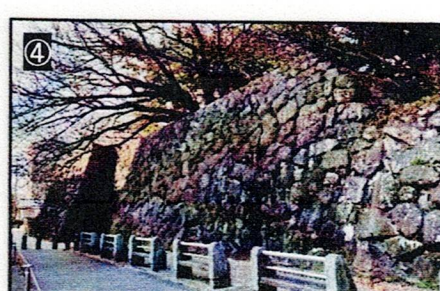
埋門 □

津城が火災に遭った時に本丸よりの脱出口として
寛永16年(1639)に造られました。出た所にあ
る幅約4mの犬走りを回って東多門櫓・太鼓
櫓下から城外に脱出できました。東側は野面積
み・西側は打込みはぎ、両隅部は算木積みです。



南多門櫓台と旧隅部 □

この部分は津城を築いた織田信包時代の津城最古の
野面積み石垣です(写真左側)。中央に見える隅部
の出張り(旧隅部)は、高虎が津城を拡張した時に
写真右側に広げた跡という説と石垣の補強のためと
いう説などがあります。



東多門櫓台と月見櫓台 □

この部分の石垣は昭和19年(1944)の東南海地震
で大きく崩壊しました。戦後に積み直されました
が、忠実に積まれておらず隅部も算木積みにはなっ
ていません。石垣崩落を防ぐために石垣の隙間にモ
ルタルが注入してあります。